

NEWSLETTER No. 70 ISSN 1340-5578 **TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ** The Society for Research in Asiatic Music May 10, 2007

社団法人 **東洋音楽学会** **会報** 第70号

発行 (社)東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
● E-mail : LEN03210@nifty.com ● ホームページ : http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/

目次

第58回 大会のご案内	1	ICTM 東アジア音楽研究会 上海大会開催のお知らせ	6
第58回 大会の研究発表募集	1	第七回 中日音楽比較研究国際シンポジウムのお知らせ	7
東洋音楽学会公開シンポジウムの報告	2	藝術学関連学会連合 第2回シンポジウムのお知らせ	8
第24回 田邊尚雄賞受賞者発表	5	会員異動	8
第75回 通常理事会議決事項のお知らせ	5	図書・資料等の受贈	10
武内恵美子氏が清栄賞を受賞	6	新刊書籍	10
情報委員会からのお知らせ	6	新発売視聴覚資料	11
会費納入のお願い	6	編集後記	12
『東洋音楽研究』原稿募集のお知らせ	6	公開シンポジウムアンケート結果	13
名簿作成についてのお願い	6		

第58回 大会のご案内

(社)東洋音楽学会は、平成19年度の研究発表大会および公開講演会を以下の通り開催します。どうぞふるってご参加ください。

1. 日時 2007年11月17日(土)~18日(日)

2. 会場 上越教育大学

〒943-8512 上越市山屋敷町1

電話・FAX : 025-521-3506 E-mail : motegi@juen.ac.jp

交通 : JR 信越線・北陸線直江津駅より、頸城バス教育大学経由 中央病院行「教育大学」下車。所要約20分

3. テーマ 「『地域』の音楽とその研究」(仮題)

4. 日程

[第1日]

10:30 理事会(直江津駅前ホテルハイマート)

13:00 受付

14:00 公開講演会

越後酒屋唄 綾子舞 パリのガムラン

(上越教育大学附属小学校児童) (以上出演予定)

17:00 田邊賞授賞式

18:00 懇親会(ホテルハイマート)

[2日目]

09:00 受付

09:30 研究発表

13:00 総会

14:40 ラウンドテーブルまたは研究発表

16:00 閉会

5. 参加費等

参加費 3000円(学生 2000円)

非会員で公開講演会のみ参加者は資料代として1000円

懇親会 6000円(学生 4000円)

大会実行委員会: 茂手木潔子(委員長)、植村幸生、江谷和樹、
薦田治子、藤野はるか、前原恵美、峯岸創

第58回 大会の研究発表募集

第58回大会における研究発表を、下記の要領で募集します。
多彩な内容の発表を期待いたします。

1. A) 研究発表(口頭発表 20分+質疑応答 10分)

B) フォーラム・シンポジウム等(約150分)

2. 申し込み方法: 題目・要旨(1,200字程度)・氏名(フォ

ーラム・シンポジウム等の場合は、代表者名とパネリスト名)
・連絡先(住所・電話番号・FAX番号・E-mailアドレス等)
・使用希望機材・その他の必要事項を明記の上、書面(電子メールによる送信ないしは郵送)で、大会事務局までお申し込みください。

3. 申し込み締め切り: 2007年7月13日(金) 必着

4. 申し込み宛先:

〒943-8512 上越市山屋敷町1

上越教育大学芸術系講座 茂手木潔子研究室気付

(社)東洋音楽学会第58回大会実行委員会事務局

電話・FAX番号: 025-521-3506

E-mail: motegi@juen.ac.jp

東洋音楽学会公開シンポジウム

「伝統文化の継承と発展 音楽教育の現場から」の報告

平成19年1月13日(土)にイイノホールにて、平成18年度科学研究費補助金「研究成果公開発表」の助成による東洋音楽学会公開シンポジウム「伝統文化の継承と発展 音楽教育の現場から」が開催された。東京都小学校音楽教育研究会、東京都中学校音楽教育研究会、日本音楽教育学会の後援を受け、フロアーには小中高の教員、全国各地の大学で音楽教育を担当する教員などを含む312名の参加者を得ることができた。

テーマに「声からはじめる日本音楽の指導」を設けた今回のシンポジウムは、これからの学校における日本音楽の指導に向けて、声に焦点あてた指導内容ならびに指導方法という新たな方向性を示すことができたという点で大きな成果をあげたといえる。これには、本学会の専門性を生かして、音楽研究、音楽教育研究、演奏の三者の協同関係のもとに、基調講演、シンポジウム、ワークショップのプログラムを組むことができた点が深く関わっている。参加者のアンケート結果(会報末尾に添付)にも「東洋音楽学会ならではの企画」という声が多く聞かれ、東洋音楽学会に期待される社会的意義、ならびに社会への発信の在り方を考える上でも貴重な一歩となった。

また、今回の企画、運営にあたっては会員、非会員を問わず多大なご協力をいただいた。なかでも、第3部のワークショップに出演の《ことこと倶楽部》のこどもたち、保護者ならびに指導者の方々は、ボランティアとして大阪から大勢で参加していただき、会場いっぱいこどもたちの元気を届けていただいた。深く感謝申し上げたい。

(実行委員会事務局 加藤富美子)

プログラム

13:00 開会のことば 会長 月溪恒子(大阪芸術大学)

13:05 第1部 基調講演 「声からはじめる日本音楽の指導」
講師 小島美子(国立歴史民俗博物館名誉教授)

13:35 第2部 公開シンポジウム
「伝統文化の継承と発展 音楽教育の現場から」
司会:伊野義博(新潟大学)

パネリスト:大熊信彦(文部科学省教科調査官)

山内雅子(小金井市立小金井第一小学校) 清水宏美(立川市立立川第二中学校) 小塩さとみ(宮城教育大学)

休憩

15:20 第3部 ワークショップ

「日本音楽の新しい指導方法 声をつかいこなそう!」

司会 澤田篤子(洗足学園音楽大学)

藤田隆則(京都市立芸術大学)

(1) 唱歌でつかむ日本音楽 能楽囃子の唱歌から

講師 大倉源次郎(能楽大倉流小鼓方)

竹市 学(能楽藤田流笛方)

(2) 声でつかむ日本音楽 はなしことばから地歌まで

その1 はなしことば~わらべうた~箏うた

講師 上西律子(《ことこと倶楽部》主宰)

狩谷春樹(箏曲家)

出演 《ことこと倶楽部》のこどもたち

その2 はなしことば~唱歌(しょうが)

講師 中村仁美(雅楽演奏家)

その3 地歌

講師 米川裕枝(地歌箏曲家)

*第1部基調講演、第2部公開シンポジウムの記録は、機関誌『東洋音楽研究』第73号に収録して公開する予定である。

第1部 基調講演

「声からはじめる日本音楽の指導」

報告 入江宣子

この会のお知らせを会報で目にした時、一瞬これって東洋音楽学会の主催?とびっくりした。音楽教育現場をテーマにした単独の公開シンポジウムという今回の形式は、大会時の公開講演会とも趣旨が異なり、「社会に向けて日頃の研究成果を還元する」をモットーに科学研究費補助金(研究成果公開促進費)を受けての初の試みだそう。久保田敏子委員長、加藤富美子事務局長のもと、昨年から実行委員会を立ち上げ準備を重ねてきたという。後援として東京都小・中学校の音楽教育研究会と日本音楽教育学会が名を連ね、学会が音楽教育の現場に一歩あゆみ寄った姿勢が伺われた。全体は第1部

小島美子氏の基調講演、第2部公開シンポジウム、第3部ワークショップの三部構成から成っていた。

基調講演で小島氏は次のように語った。日本の音楽教育は長い間「音楽の本場はヨーロッパだ」と教えクラシック音楽を歌い演奏することを目標にしてきたが、これは大きな間違いである。音楽の目的は、今自分が心の中で思っていることを感じていることを、自分の言葉で歌い表現することである。



[基調講演]

そのためには日本の伝統的音楽の旋律やリズム観がもっとも自然で身近な世界である。まず短い旋律にのせて替え歌を作ってみよう。伝統的民謡は自由に歌詞を替えて歌うのがむしろ歓迎された。自分の思いを歌にすることで気持ちの客観化もできるし、発散もできる。そして他人によく聞いてもらうために、テクニックの必要を感じ積極的に学ぶようになるだろう。他人の歌や音楽にも耳を傾けるようになるだろう。日本では楽器の学習も口唱歌から始める。声からはじめればごく自然な形で日本の音楽に入っていけるはずである。

第2部 公開シンポジウム

第2部シンポジウムは新潟大学伊野義博氏の趣旨説明と司会により、教育行政の立場から文部科学省教科調査官大熊信彦氏、教育現場から東京立川市立立川第二中学校教諭清水宏美氏、東京小金井市立小金井第一小学校教諭山内雅子氏、研究者として宮城教育大学小塩さとみ氏、以上4人の方をパネリストに迎えて意見交換が行われた。

まず伊野氏が「日本の楽器を学ぶ子供は増えてきたが、今後声の指導も注目されよう。さまざまな問題を抱えている現場の教師にとって、実演家、研究者との協体制度は急務である。現場の課題解決に対し、音楽学は何を期待され何ができるのかを、具体的実践を通して探っていきたい」と述べた。ついで大熊氏は、「昨年暮の12月22日公布施行されたばかりの新しい教育基本法の前文に明記の「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」という文言は、従来から音楽教育で掲げられている目標そのものである。中央教育審議会の審議過程で示された「我が国の音楽文化の指導のあり方」(素案)に関して、我が国の伝統音楽を基盤としつつ、他国の音楽文化を尊重する態度を育成する。郷土の音楽を教材に取り上げる。我が国で長く歌い継がれてきた歌や伝統的歌唱を重視する。伝統的な音素材の特徴を生かし

た学習を充実する。以上4点の調和を図った指導の工夫が求められる。」と述べた。

続いて清水氏と山内氏からはそれぞれ自校での実践例が、豊富な資料と映像とともに紹介された。それはもっぱらピアノ伴奏によって歌を習ってきた私世代の音楽の時間からはまったく想像もつかない、創意と工夫に満ちた授業であった。小学校では実演家を交えての謡、民謡の実技指導、中学校では日本諸外国古今東西さまざまな声を聞かせ、その特徴を感じ自分の旋律を創作させる、あるいは実技体験させるなど、両例とも教師自らの日本音楽学習を通して編み出された大変密度の濃い内容であった。ともに「ソーラン節」を三味線伴奏で歌っていたが、三味線に導かれるように声も地声になるのが興味深かった。清水先生は「あるがままの声」「曲種に応じた発声」を引き出し、自己表現の手段として「こぶし」や「間」を工夫させていた。山内先生は、自ら作編曲した「ソーラン節合唱曲」を頭声と地声の両様の発声で歌い分け、NHKのコンクールで東京都代表になった。以前は「こぶし」の指導をしたが、今は特に意識させずに歌わせているという。おふたりの熱意には圧倒されたが、すべての先生がこのように自信と信念をもって教えているわけではないだろう、試行錯誤真っ最中の現場も多いはずである。



[公開シンポジウム]

最後の小塩さとみ氏の話 요약する。もともと日本音楽には実に多様な声が存在し、その教授法はひたすら聴いたものを真似ることであってマニュアル化できない。「わかりやすく」「効率的に」教えることが求められる学校で困難さが伴うのは当然である。ではどうすればよいか。まず安易なパッケージ教材は、選ばれたものだけを提示することになるので使わない。教材としては複数世代に伝承されたもの・地域に関連あるものを選ぶ。それぞれの教授法を尊重し、効率は求めない。結果として個人的には限られた分野しか深く学習できないが、日本音楽を計る物差しを持つことになり、日本全体からみれば多種多様な音楽を伝えることになる。また長期的計画での教員養成システム、実技を教える専任講師の採用などにも言及した。後の質疑で自らの発言を「一種の極論ではあるが・」と謙遜しておられたが、私にとっては実に小気味よ

い話であった。無理してあれもこれも欲張ることはないのである。日本音楽の良さを知るきっかけとしては、じっくり時間をかけてなにか一つ身につければ良い。大人になって皆でソーラン節を歌えるのも勿論楽しいが、謡であれ長唄であれ、各人が独自の持ち歌を披露できればもっと楽しいではないか。

会場から評価の仕方について質問があった。予め設けた具体的目標にどう対応できたかで評価をすることのこと。お稽古ごとや部活動と、授業との違いはこの評価であろう。しかも授業時間は限られている。いずれにしろ声は楽器よりも子供達の根源的なものに直接迫る力を持っていることを思えば、声の導入は和楽器以上にインパクトがあるはずである。実演家(この用語を私は今回知った)と現場の教師と音楽研究者の三者が、本音をぶつけ合い具体的な教授法を体系化する交流の場が、もっともっと必要になるだろうと確認しあって第2部を終えた。

第3部 ワークショップ報告

報告 降矢美彌子

第3部では1.「唱歌でつかむ日本音楽 能楽囃子の唱歌から」、2.「声でつかむ日本音楽 はなしことばから地歌まで」と題して4種の日本音楽のワークショップが催された。持ち時間は各30分と短いものの、講師の方々のわかりやすいご指導から多くの示唆を与えられ、日本音楽の指導に取り組む上で力強い後押しをいただいた観がある。基調講演とラウンドテーブルを受けて、常にもまして意欲の高まりを感じたのは恐らく筆者だけではあるまい。

今回のキーワードとなった「唱歌」は、本来、伝統楽器の学習にとって補助手段である。しかし、たとえ楽器を学ばない場合でも、「唱歌」が指導法しだいで日本音楽の指導に有効な存在となること、また「唱歌」を歌うことで伝統音楽の本質的な学習が可能であることを、4種のワークショップは参加者にはっきりと印象づけた。この点が、今回の試みの最大の意義であろう。

第3部の講師、大倉流小鼓方の大倉源次郎氏は、「見たことがあるものでも、実際にやろうとしてできないことがある。だからこそ、体験を大切にしてほしい」と語られた。その言葉どおり、いずれのワークショップも学習における体験と体感の大切さを改めて感じさせる内容にみちていた。ことに大倉氏の小鼓修行をめぐる体験談は、われわれに能楽界の伝統的な音楽観をまざまざと示すものであった。氏はまず、小鼓を学ぶ作法、師と弟子の関係について話され、次に、小鼓を「お道具」と呼んで尊ぶことを紹介され、以下のエピソードを語られた。

幼かった大倉氏が、遊んでいて足を放りだしていたところ、ご祖父がマッチ棒に火をつけて、飛んで来られたという。「もし家が火事になったら、お前は焼け死んでも小鼓を持ち出さない」と。放りだした足の先には、「お道具」である小鼓があって、それとは知らずに大倉氏は、「お道具」に足を向けていたのだと言う。このエピソードは、門外漢の私たちに、能楽囃子方の家に伝承される小鼓という楽器の意味を、強烈な印象をもって知らせることとなった。このように、なまの言葉から楽器の歴史や背景を知り、「唱歌」を実際に歌い、本物の演奏を聴くことこそ、おそらく子どもたちの魂を揺さぶる日本音楽の体験となるろうと、私には実感された。子どもたちの日本音楽の学習は、体験を通して心を揺さぶられるものであってほしいと心から思う。



[ワークショップ 大倉源次郎氏 竹市学氏]

以下、順を追って、ワークショップの概略を記す。

1. 能楽囃子の「唱歌」から 講師：大倉源次郎(能楽大倉流小鼓方) 竹市学(能楽藤田流笛方)

鼓や笛の囃子の学習は、声による「唱歌」が根本をなす。小鼓と笛の音を聴くことを「おしらべ」といい、チューニングの意味を持つが、思い思いに音を出し、その日の空気や感情を感じ取る大切なものである。小鼓には、「チ」「タ」「ブ」「ポ」という口鼓があり、左手で持ち右肩に乗せて右手で打つ。小鼓は、紐を解くと胴と皮に分解でき、古い皮を老皮と呼んで尊ぶ。大倉氏の小鼓の胴は、江戸初期のものである。

能管は、竹を10以上に割いたものを裏向きに合わせて作られている。12音階は、7~8世紀に日本に渡来したが、謡の声に合わせ、15・6世紀の能楽師はこの音階を崩して今日の特徴ある音階になった。「ひしぎ」という甲高い音は、現世と来世、現実と非現実の切り替えに使われる。

能楽は山のようなもので、いろいろな登り方があるが、「お道具」を通して先人の教えを受け、師と決めた1人について行く。道は違うが皆同じ山をのぼり、めざしている所は同じだという教えを代々続けてきている。

実技体験：「三番叟」の笛と小鼓の「唱歌」。演奏：「獅子」

2. 声でつかむ日本音楽 はなしことばから地歌まで

1) はなしことば～わらべうた～箏うた

講師:上西律子(《ことこと倶楽部》主宰) 狩谷春樹(箏曲家)

《ことこと倶楽部》の19名の子どもたちが、「たけのこ一本」「だるまさん」「はないちもんめ」「らかんさん」「ダイヤモンド買うてんか」などわらべうたで遊び、遊んだわらべうたを箏で弾く。これは、遊びの体験から音楽学習へという子どもにとって有効な箏の学習方法で、ハンガリーのコダーイの理念にも通じるといえよう。最後に会場と子どもたちで、かけあいのわらべうた「大和の源九郎はん」を歌った。



[ワークショップ 上西氏、狩谷氏、《ことこと倶楽部》のこどもたち]

2) はなしことば～唱歌(しょうが)

講師:中村仁美(雅楽演奏家)

箏には、指遣いによらず音を微妙に上下させる奏法があるため、「唱歌」の学習が非常に重要で、「唱歌」なしに楽器の奏法は学べない。雅楽では、箏の旋律が他の楽器や舞の基礎になっているので、他の楽器も箏の旋律を頭の中で歌いながら奏する。姿勢は、平安時代から「楽座」と呼ぶあぐらで行う。

実技体験:「越殿楽」の箏の「唱歌」。



[ワークショップ 中村仁美氏]

3) 地歌

講師:米川裕枝(地歌箏曲家)

地歌は表声(地声)で歌うもので、裏声もなるべく地声のように歌うのが特徴である。米川氏の歌(合の手に続く「聞くも淋しき...」)をわれわれも繰り返し歌ううちに、地歌への親愛感とでもいうべき感情が生まれたことに、口頭

伝承の力を改めて実感したことであった。

実技体験:地歌「雪」合の手に続く歌の部分。



[ワークショップ 米川裕枝氏]

第24回 田邊尚雄賞受賞者発表

第24回田邊尚雄賞は、以下のように決定いたしました。

受賞者 武内恵美子

推薦対象 武内恵美子『歌舞伎囃子方の楽師論的研究 近世上方を中心として』和泉書院、2006年2月発行
推薦理由 本書は、近世上方において歌舞伎囃子方として活動した音楽家集団の実態を、資料から抽出した基礎データの統計処理とその分析を通して解明した力作である。明快な視座と論証方法により、研究の遅れていた上方の歌舞伎囃子方研究に大きな一歩を刻する成果であると認められた。

前号8頁「田邊尚雄賞アンケートのお願い」記事の訂正
選考委員長を小柴はるみ氏と記載しましたが、塚原康子氏の誤りでした。ご関係者各位、また会員の皆様方にご迷惑をおかけいたしました。ここに、お詫びし訂正いたします。

第75回 通常理事会議決事項のお知らせ

2007年4月1日(土)に作楽会館(東京都文京区)で第75回通常理事会が開催されました。そこで承認された主な議決事項をお知らせいたします。

- (1) 前回理事会(2006年10月7日)以降2007年4月1日までに申し込みのあった正会員14名、学生会員5名の入会が正式に承認されました。
- (2) 平成19年度研究発表大会および公開講演会:本号の関連記事をご覧ください。
- (3) 第24回田邊尚雄賞受賞者:本号の関連記事をご覧ください。
- (4) 第25回田邊尚雄賞選考委員として、小柴はるみ、藤田隆則、水野信男(以上留任)、佐藤道子、山川直治(以上新任)の五氏を委嘱することが承認されました。

- (5) 会費を長期に滞納している12名を退会扱いとすることが承認されました。
- (6) 井上登喜子氏(機関誌) 大沼覚子氏(東日本支部) 園田郁氏(西日本支部) 藤本寛子氏(総務: 田邊尚雄賞担当)への参事の委嘱が正式に承認されました(委嘱期間等の詳細は省略します)。
- (7) 塚田健一氏に代わり早稲田みな子氏にICTM担当委員を委嘱することが承認されました。

武内恵美子氏が清栄賞を受賞

本学会員の武内恵美子氏が、第20回財団法人清栄会奨励賞(研究者部門)を受賞されました。『歌舞伎囃子方の楽師論的研究 近世上方を中心として』(和泉書院、2006年2月)の研究成果が評価されたことによります。4月23日(月)に、国立劇場本館2階第6会議室において、受賞式が行われました。

情報委員会からのお知らせ

学会のホームページ(<http://www.soc.nii.ac.jp/tog/>)に「学会からのお知らせ」というコーナーができました。会報に掲載する情報の中で、少しでも早く会員の皆様にお知らせしたい情報をこのコーナーに掲載しています。どうぞご利用ください。また学会のホームページに対するご意見がありましたら、学会事務所(LEN03210@nifty.com)までお寄せください。

会費納入のお願い

2006年度(2006年9月1日~2007年8月31日)までの会費を未納の方に、請求書と振替用紙を同封いたしました。請求書で未納金額をお確かめのうえ、早速お払い込みください。なお、本誌と行き違いに納入された場合は、どうぞご容赦ください。

『東洋音楽研究』原稿募集のお知らせ

学会機関誌『東洋音楽研究』第73号(2008年8月刊行予定)の原稿を募集しています。

投稿を希望される方は、本誌最新号に掲載した「投稿規程」および学会ホームページに掲載している「投稿の手引き」をよくお読みの上、ご投稿ください(学会ホームページをご覧になれない場合は、機関誌編集委員会にご請求ください)。

送付先: 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学 文教育学部音楽科 永原研究室気付
(社)東洋音楽学会機関誌編集委員会

締め切り: 2007年12月20日(木)必着

名簿作成にご協力ください

本年は学会名簿作成の年にあたります。新しい名簿は、本年8月末発行予定の機関誌に同封されます。同封のハガキに必要事項を記入の上、6月15日までに投函してください。メールでの連絡も受け付けます。その場合は、件名を「名簿作成データ」とし、ハガキに書かれた必要事項を学会事務所(LEN03210@nifty.com)へ6月17日までに送信してください。いずれの場合も締め切り厳守、なるべく早めに情報をお寄せください。会員の皆様のご協力をお願いします。

なお、会員名簿は会員相互の円滑な連絡のために作成するものです。作成にあたっては、情報管理に細心の注意を払っています。会員の皆様には、名簿内容の管理に充分ご留意ください。

ICTM 東アジア音楽研究会 (MEA) 上海大会開催のお知らせ

日時: 2007年12月20~22日

基調講演: エイドリエン・ケップラー博士

ICTM(国際伝統音楽学会)の下部組織として昨年発足した東アジア音楽研究会(Study Group for Musics of East Asia 通称MEA)は、来る2007年12月20~22日、上海音楽院にて国際会議を開催します。前回の東日本支部だよりとともに同大会のお知らせを同封しましたが、今回はより詳細な情報をお伝えします。

MEAは、第一回大会を昨年台湾で開催しましたが、今回の上海大会は、同研究会がICTM理事会に正式に下部組織として認証されて以来、公式には初めての国際会議となります。この記念すべき第一回大会には、ICTMの現会長で太平洋地域の音楽研究の第一人者であるエイドリエン・ケップラー博士をお招きし、基調講演をしていただきます。氏は、昨年ハワイで行われたSEM(Society for Ethnomusicology アメリカ民族音楽学会)の大会でも基調講演を行いました。アメリカ人研究者の中でも大御所のケップラー博士が、東アジア音楽研究者に対してどのような講演をしてくださるのか楽しみです。ホストである上海音楽院の意向により、今回の大会では研究発表に加え、音楽作品も募集します。発表申し込みの詳細、申し込み用紙等は、MEAのホームページ(<http://homepage.ntu.edu.tw/~gim/mea/>)に掲載されていますが、ここで簡単に概要をお知らせします。

研究発表・音楽作品発表の申込み締切り:2007年6月15日
研究発表はEメールでの申し込みを奨励しますが、やむなく郵送される場合は、当日消印まで有効です。

研究発表の申込みについて

個人研究発表は、一人につき30分(発表20分、質疑応答10分)です。公式言語は英語です。研究発表の申込みは、以下をEメールに添付してお送りください。

- 1) 研究発表申込書(MEAのホームページから書式をダウンロードできます)
- 2) 350語以内の要旨(英語):要旨の審査は匿名で行いますので、要旨中にご自分の氏名を含めないようご注意ください。

提出先: ictm.me@gmail.com

学会テーマ

1. 東アジア音楽の展開における上海の役割
2. 伝統音楽に関わる諸問題
伝統音楽の変遷、維持、伝承の問題、伝統音楽と、新曲の創作、生態環境、文化政策、近代教育システムとの関連等、このテーマは幅広いトピックを含みます。
3. 東アジア音楽と植民地主義
4. 音楽、アイデンティティーと国民国家のイマジネーション
5. 東アジア音楽の楽譜解釈
6. 新しい研究

音楽作品の発表申込みについて

募集する音楽作品の条件は以下のとおりです。

- 1) 2000年1月1日以降に創作されたもの(未発表か否かは問いません)
- 2) 現代のコンテクストにおける東アジア伝統音楽文化の解釈にもとづくもの
- 3) 演奏時間が15分程度のもの(一人の持ち時間は25分程度、演奏約15分、解説約10分)

上海音楽院では、小規模編成の西洋楽器オーケストラ、或は中国楽器のアンサンブルを提供できます。それ以外の楽器編成を用いる作品は、録音または録画による発表になります。

作品発表申込みは以下を郵送してください。

- 1) 作品発表申込書(MEAのホームページから書式をダウンロードできます)
- 2) 作品の概要: タイトル、演奏時間、楽器編成を含め、作品の内容やポイントについてまとめたもの
- 3) 完全なスコアかそれに相当するもの
- 4) 作品の録音または録画(完全なもの): 媒体は、CD-R、音楽CD、カセットテープ、MD、DVD(地域コード6=中国コードのみ)、VHSテープのいずれか

提出先: MEA Composition Committee-Shanghai 2007
Dept. of Musicology
Shanghai Conservatory of Music
20 Fenyang Road, Shanghai, 200031
P. R. China

ICTM会員でない方も参加は可能ですが、発表する場合は発表時までには会員になる必要があります(ICTMの会員登録は、ウェブサイト <http://www.ictmusic.org> にて行うことができます)。発表者の現地での宿泊費・食事はかかりません。

ICTM東アジア音楽研究会は、共通の興味をもつ世界中の研究者同士が言語の壁を越えて活発に交流できる場を提供することを目的とした、アットホームでフレンドリーな集まりです。英語を母国語としないメンバーが大多数ですので、英語に抵抗のある方も、是非思い切ってお参加いただきたいと思います。また学生の参加も奨励しています(学生への旅費助成金も現在検討中)。MEA上海大会について、ご不明な点等ありましたら、プログラム委員の早稲田みな子までメール(minako_waseda@msn.com)にてお問い合わせください。上海で多くの東洋音楽学会会員の方々にお目にかかることを楽しみにしています。

(早稲田みな子 ICTM東アジア音楽研究会、上海大会プログラム委員)

第七回 中日音楽比較研究国際シンポジウムのお知らせ

中日音楽比較研究国際シンポジウムは、中日音楽文化交流の促進を趣旨として二年に一度開催されます。1995年の発足以来、中国福建師範大学、天津音楽学院、ハルビン師範大学、沖縄芸術大学、中国上海音楽学院、湖南師範大学をそれぞれ主催校として、すでに通算六回開かれまして、今年も、第七回シンポジウムを武漢音楽院が主催校となって開催します。全スタッフ総力をあげて準備にあたっていますので、学会員のみならずご参加ください。

日時: 2007年9月8日~11日

会場: 中国武漢市武昌紫陽路1号 武漢音楽学院

主催: 武漢音楽学院

募集論文の課題

- 1) 中、日伝統音楽の歴史と現状及び両国の交流
- 2) 中、日音楽教育の歴史と現状及び両国の比較
- 3) そのほかの関連研究

要旨と論文の提出

会議開催の前に論文集を刊行する予定なので、応募者は以下の要領に従って、要旨と論文を提出して下さい。

1) 発表要旨提出: 2007年6月1日(必着)

・論文タイトルと要旨のほか、著者名、性別、所属、職名、

住所、電話、メール・アドレスなどの情報を含む。日本の参加希望者はなるべく中国語と日本語の二ヶ国語の要旨を提出してください。

・要旨の選考を経て採択された方に、ただちに正式な招待状を送付します。

2) 発表論文提出: 2007年8月1日(必着)

- ・Word7.0以上で入力して下さい。
- ・日本の参加予定者は中国語訳文もご提出ください。
- ・電子メールでの提出を歓迎します。

連絡方法

郵送先: 中国武漢市武昌紫陽路1号 武漢音楽学院音楽学部

電話: +86-27-88068739(実行委員会)

E-mail: yyxx@whcm.com.cn

日本側の参加者の連絡先: 周 耘

電話: +86-27-88048177(中国) 090-3594-6750(日本)

E-mail: ynd1218@yahoo.co.jp

(第七回 中日音楽比較研究国際シンポジウム実行委員会
中国武漢音楽学院音楽学部 周 耘)

藝術学関連学会連合

第2回シンポジウムのお知らせ

藝術学関連学会連合では、下記の日程で第2回のシンポジウムを企画しています。みなさまのご参加をお待ちしています。

テーマ: 『芸術は誰のものか?』

著作権問題を芸術学から考える 』

日時: 2007年6月16日(土) 13時~17時(予定)

会場: 京都国立近代美術館

オーガナイザー・司会: 木村建哉氏(日本映像学会)、渡辺裕氏(日本音楽学会)

パネリスト: 兼子正勝氏(日本映像学会)、島本澁氏(美学学会)、塚田健一氏(東洋音楽学会)、コメンテーター: 名和小太郎氏(法とコンピュータ学会)、ディスカッサント: 岡田温司氏(美術史学会)、増田聡氏(日本音楽学会)(予定)

詳しくは藝術学関連学会連合のホームページをご参照下さい。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/geiren/index.html>

(藝術学関連学会連合派遣委員 遠藤 徹)

会員異動

<Web版につき省略>

住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail等でも結構です)

改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)

事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈

(2006年12月~2007年4月、到着順)

は寄贈者(発行者と同一の場合は省略)

- 『楽道』12,1,2,3,4月号 正派邦楽会
- 『東方學會報』No.91 (財)東方学会
- 『文化人』第2号 文化人会
- 『ぎふ民俗音楽』第70,71号 岐阜県民俗音楽学会
- 『白い国の詩』2007冬号 東北電力(株)
- 『北方民族歌の旅』 谷本一之著 北海道新聞社
- 『近代日本における音楽観 兼常清佐を中心に 』
科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
研究代表者 蒲生美津子
- 『音楽文化のすすめ いまここにある音楽を理解するために 』 小西潤子・仲万美子・志村哲 編 加叺出版
- 『Bulletin of Vietnamese Institute for Musicology 』
No.19 Vietnamese Institute for Musicology
- 『高岡御車山』 高岡市教育委員会 飛鳥寛栗
- 『高岡御車山祭お囃子』(CD) 清文堂書店 飛鳥寛栗
- 『研究紀要』XXVII エリザベト音楽大学
- 『音楽学』第52巻2号 日本音楽学会
- 『警女と警女唄の研究』研究篇・史料篇
ジェラルド・グローマー著 名古屋大学出版会
- 『演劇研究センター紀要』VIII, IX
早稲田大学21世紀COEプログラム
- 『研究紀要』第13号
北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 『雅楽の変遷 古の音色を求めて 』 展覧会解説図録
思文閣美術館 上野学園大学日本音楽史研究所
- 『楽は楽なりII 中国音楽論集 古楽の復元 』
明木茂夫 主編 中京大学文化科学研究所
- 『演劇映像』第48号 早稲田大学演劇映像学会

新刊書籍

- 『ありそうでなかった形から引ける 音楽記号辞典』ヤマハミュージックメディア、1,575円
- 『上を向いて歌おう 昭和歌謡の自分史』永六輔、飛鳥新社、1,500円
- 『歌声の科学』ヨハン・スンベリ(榊原健一監訳) 東京電機大学出版局、3,150円
- 『うたのおくりもの』姜信子、朝日新聞社、1,575円
- 『音の記憶 NHK交響楽団の80年』佐野之彦、文藝春秋、1,470円
- 『音楽をまとう若者』小泉恭子、勁草書房、3,570円
- 『音源の流体音響学(音響テクノロジーシリーズ10)』吉川茂、和田仁、日本音響学会編、コロナ社、3,990円
- 『女づくり』市川春猿、徳間書店、1,365円
- 『海峡のアリア』田月仙、小学館、1,575円
- 『楽器のしくみがわかる絵事典』PHP研究所編、PHP研究所、2,940円
- 『樂家録(覆刻日本古典全集)1』安倍季尚、正宗敦夫、現代思潮新社、4,620円
- 『樂家録(覆刻日本古典全集)2』安倍季尚、正宗敦夫、現代思潮新社、4,725円
- 『樂家録(覆刻日本古典全集)3』安倍季尚、正宗敦夫、現代思潮新社、5,355円
- 『樂家録(覆刻日本古典全集)4』安倍季尚、正宗敦夫、現代思潮新社、5,670円
- 『樂家録(覆刻日本古典全集)5』安倍季尚、正宗敦夫、現代思潮新社、4,725円
- 『かぶき手帖 2007年版』伝統歌舞伎保存会編、松竹株式会社編、日本俳優協会編、日本俳優協会、1,300円
- 『歌舞伎ハンドブック 第3版』藤田洋、三省堂、1,575円
- 『歌舞伎ヒーローの誕生』利根川裕、右文書院、1,890円
- 『歌舞伎百年百話』上村以和於、河出書房新社、1,890円
- 『歌舞伎ヒロインの誕生』利根川裕、右文書院、1,890円
- 『歌舞品目(覆刻日本古典全集)上巻』小川守中、正宗敦夫、現代思潮新社、3,780円
- 『歌舞品目(覆刻日本古典全集)下巻』小川守中、正宗敦夫、現代思潮新社、4,830円
- 『貴志康一 永遠の青年音楽家』毛利真人、国書刊行会、3,360円
- 『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集6 清和源氏十五段』義太夫節正本刊行会、玉川大学出版部、2,415円
- 『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集7 京土産名所并筒』義太夫節正本刊行会、玉川大学出版部、2,415円
- 『教訓抄(覆刻日本古典全集)』粕近真、正宗敦夫、現代思潮新社、6,090円
- 『續教訓抄(覆刻日本古典全集)上』粕朝葛、正宗敦夫、現代思潮新社、4,620円
- 『狂言の美学』小島元雄、創元社、4,200円
- 『近代歌舞伎年表 名古屋篇(全7巻+別巻予定)』国立劇場近代歌舞伎年表調査養成部調査資料課編、八木書店、151,200円
- 『皇室制度史料 儀制 成年式二』宮内庁書陵部編纂、吉川弘文館、12,075円
- 『心はくぐむ音楽 音楽療法の実践現場より』大塚隆子、新風舎、1,050円
- 『古代蝦夷からアイヌへ』天野哲也・小野裕子編、吉川弘文館、12,600円
- 『古代中世音楽史の研究』荻美津夫、吉川弘文館、8,925円
- 『箏(和楽器教本)』滝田美智子、グッドク-ル、2,310円
- 『箏と箏曲を知る事典』宮崎まゆみ、東京堂出版、2,940円
- 『子ども歌を学ぶ人のために』小野恭靖、世界思想社、2,415円
- 『賛美歌・唱歌・ゴスペルものがたり』大塚野百合、創元社、2,520円
- 『すべてを否定しない生き方』東儀秀樹、ロングセラ-ズ、1,470円
- 『俗曲師うめ吉のニッポンしましょ!』松山うめ吉、毎日新聞社、1,470円
- 『染五郎と読む歌舞伎になった義経物語』小野幸恵、岩崎書店、1,260円
- 『体源鈔(覆刻日本古典全集)1』豊原統秋、正宗敦夫、現代思潮新社、5,145円
- 『体源鈔(覆刻日本古典全集)2』豊原統秋、正宗敦夫、現代思潮新社、5,460円
- 『体源鈔(覆刻日本古典全集)3』豊原統秋、正宗敦夫、現代思潮新社、6,825円
- 『体源鈔(覆刻日本古典全集)4』豊原統秋、正宗敦夫、現代思潮新社、6,825円
- 『武満徹のシネマ館(DVD BOOK)』小学館、3,990円
- 『武満徹を語る12人』粟津潔、小学館、2,520円
- 『武満徹を語る15の証言』粟津潔、小学館、3,150円
- 『中世の天皇と音楽』徳永聡美、吉川弘文館、7,875円
- 『ドレミを選んだ日本人』千葉優子、音楽之友社、2,625円
- 『日本音楽基本用語辞典』音楽之友社、1,890円
- 『日本戦後音楽史 上 戦後から前衛の時代へ』日本戦後音楽史研究会、平凡社、5,040円
- 『日本歴史(別冊)総目録 1号~700号』日本歴史学会編集、吉川弘文館、2,625円
- 『ノイズ 音楽/貨幣/雑音(新装版)』ジャック・アタリ(金

- 塚貞文訳) みすず書房、3,360円
- 『能にも演出がある』横道万里雄著、檜書店、2,940円
- 『反西洋音楽論』石井宏、PHP研究所、1,575円
- 『肥後・琵琶語り集(伝承文学資料集成)』野村真智子、三弥井書店、9,240円
- 『百歳の歌謡面白話 大津絵と歌謡曲』渡邊三省、パロル舎、2,100円
- 『姉妹(ふたり)の松韻箏曲に咲いた二代の譜』六代山勢松韻、後藤淑子、清流出版、2,100円
- 『補完・代替医療音楽療法』高橋多喜子、金芳堂、1,890円
- 『三木露風童謡詩集赤とんぼ(歌のCD付き)』福嶋朝治編、三木卓・上笙一郎解説、ネット武蔵野、1,600円
- 『明治以前薩摩琵琶史私考』島津正、ペリかん社、3,150円
- 『世にもおもしろい狂言』茂山千三郎、集英社、714円
- 『リズムの本質(新装版)』L・クラークス、みすず書房、1,800円
- 『リリー、モーツァルトを弾いて下さい』多胡吉郎、河出書房新社、1,890円
- 『笑う沖縄 「唄の島」の恩人・小那覇舞天伝』曾我部司、エクスマレッジ、1,890円

新発売視聴覚資料

DVD

- 『歌舞伎名作撰 伊賀越道中双六 沼津』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 梶原平三誉石切』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 祇園祭礼信仰記 金閣寺』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 極付幡随長兵衛』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 黒塚』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 新皿屋舗月雨暈 魚屋宗五郎・茨木』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 助六由縁江戸桜』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 曾我綉侠御所染 御所五郎蔵』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 壇浦兜軍記 阿古屋』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 通し狂言 仮名手本忠臣蔵 大序・三段目・四段目』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 通し狂言 仮名手本忠臣蔵 道行・五段目・六段目』NHK エンタ - プライズ、4,935円

- 『歌舞伎名作撰 通し狂言 仮名手本忠臣蔵 七段目』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 通し狂言 仮名手本忠臣蔵 九段目・十一段目』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 雷神不動北山桜 毛抜・鳴神』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 慙紅葉汗顔見勢 伊達の十役』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 棒しばり・年増・供奴』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『歌舞伎名作撰 義経千本桜 渡海屋・大物浦』NHK エンタ - プライズ、4,935円
- 『十一代目市川海老蔵 襲名披露 パリ公演全記録』SHV 松竹ホ - ムビデオ、8,400円

CD

- 『お祝いシリーズ 寿 江戸里神楽の世界』COCJ-34058、2,000円
- 『お祝いシリーズ 源氏物語の世界』COCJ-34057、2,000円
- 『お祝いシリーズ 大和楽 ひともし舞踊特選』COCJ-34056、2,000円
- 『京山幸枝若浪曲全曲集 左甚五郎シリーズ(1)~(10)』COCJ-34253~34262、各1,800円
- 『京山幸枝若浪曲全曲集 左甚五郎シリーズ(BOX)』XT-2454-63、18,000円
- 『決定盤 八代目 桂文楽 落語集』COCJ-34273-4、3,000円
- 『決定盤 十代目 金原亭馬生 落語集』COCJ-34271-2、3,000円
- 『決定盤 五代目 古今亭志ん生 落語集』COCJ-34265-6、3,000円
- 『決定盤 六代目 三遊亭圓生 落語集』COCJ-34267-8、3,000円
- 『決定盤 五代目 柳家小さん 落語集』COCJ-34269-70、3,000円
- 『五代目 古今亭志ん生 やっぱり“志ん生”落語コレクション 古今亭志ん生名演集』COCJ-34185-97、21,000円
- 『滑稽浪曲集(一)京山幸枝若 左 甚五郎~竹の水仙~』COCJ-34067、1,500円
- 『滑稽浪曲集(二)二代目広沢虎造 石松代参/石松三十石道中』COCJ-34068、1,500円
- 『滑稽浪曲集(三)相模太郎 新版 灰神楽三太郎~大当りの巻~二代目相模太郎 粗忽の使者』COCJ-34069、1,500円
- 『滑稽浪曲集(四)日吉川秋斎 水戸黄門~安倍川哀話~日吉川秋水 水戸黄門~建碑の巻~』COCJ-34070、1,500円
- 『滑稽浪曲集(五)三門博 唄入観音経~頓知問答~広沢菊春

左甚五郎～猫門の由来～』COCJ-34071、1,500円

『立川談志 「談志百席」古典落語 CD BOX 第五期』
COCJ-34041-50、21,000円

『林家たい平 林家たい平落語集～たい平よくできました4
～』COCJ-34242、2,000円

『復元 幻の「長時間レコード」 山城少掾 大正・昭和の
文楽を聞く』紀伊國屋書店、12,000円

『舞踊名曲集 21～23』COSF-1919～1921、各1,200円

編集後記

今号は、大会のお知らせほか、1月の学会主催公開シンポジウムの報告、中国での二つの国際会議予告など、盛りだくさんの内容となりました。お忙しいなか原稿をお寄せ下さった皆様に御礼もうしあげます。今後も、本学会員全体にかかわる催しなど、情報がありましたらお知らせください。次号は9月10日発行予定です。

会報編集委員会

理事：野川美穂子、尾高暁子

参事：青柳万紀子、重田絵美、柴田真希、新堀歡乃、
瀧知也、星野厚子、柳澤久美子

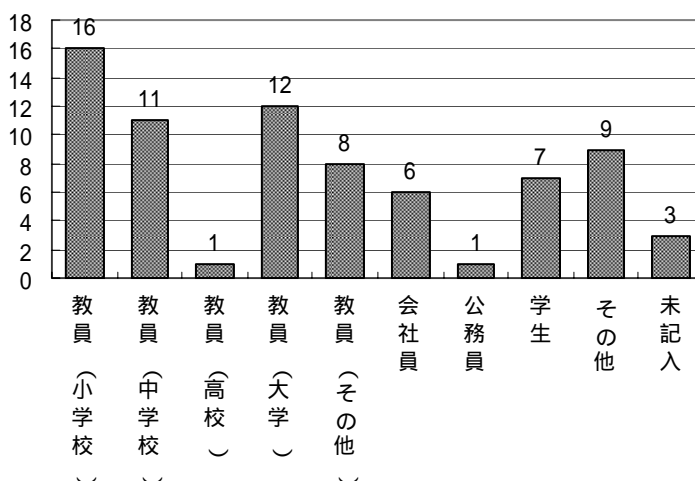
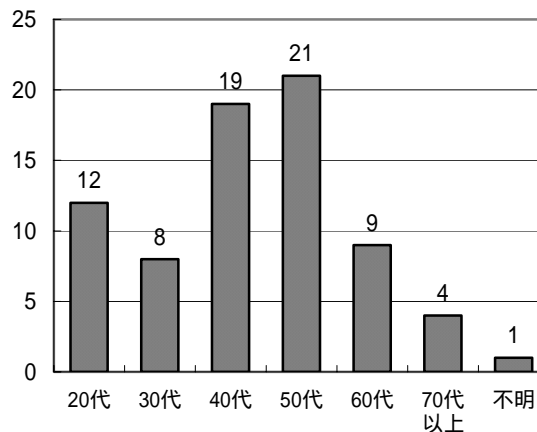
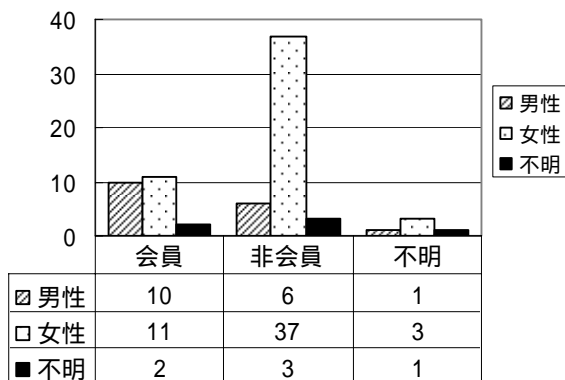
公開シンポジウム 伝統文化の継承と発展 - 音楽教育の現場から アンケート結果

1. アンケート回答数

出席者 313名 アンケート回答数 74名 回答率 24%

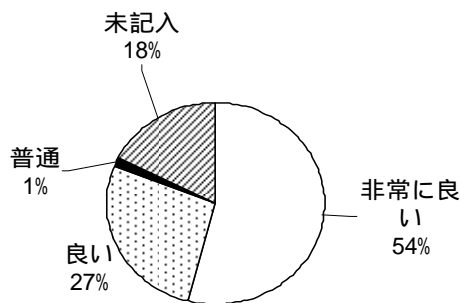
2. アンケート回答者の内訳

回答総数 74名中、46名が東洋音楽学会の会員ではない方(男性6名、女性37名、不明3名)。50代の参加者が多かった。教員(小学校、中学校、高校、大学、その他)は48名。



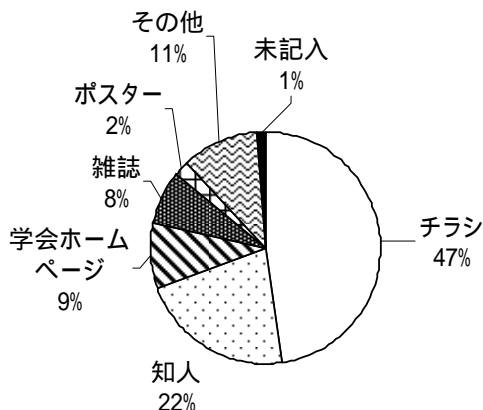
3. 公演に対する感想

回答総数の54%にあたる40名の方から、「非常に良い」という感想をいただいた。



4. 公演を知ったきっかけ(複数回答可の項目)

チラシを見て参加された方が最も多く、44名(回答総数の47%)。



5. 催し全体に対するご意見や感想

- ・充実した画期的な内容であった(多数の方から)。
- ・音楽教育と音楽学の両者を交えた会が開かれたことは、大きな進歩(20代男性)。
- ・邦楽の教育方法に具体的な歩みが始まったことを嬉しく思う(50代男性)。
- ・音楽教育の現場、研究者、文科省、演奏家、子供達のすべての立場からのアプローチで面白かった(20代女性)。
- ・教育行政、音楽教育の現場、研究者、演奏家の交流の大切さを考えさせられた(20代女性)(20代男性)(40代女性)(60代女性)。
- ・日本音楽を授業で取り入れるヒントをもらった(40代女性)。
- ・これまでの音楽教育を反省し、今後どう取り組んでいけばよいのか、考える機会をもらった(40代女性)。
- ・「声からはじまる」というタイトルで、声に重点を置いた点が良かった(70代以上男性)(40代女性)(60代女性)。
- ・日本の声の大切さを知った(50代男性)。
- ・授業で日本の声をどう取り扱えばよいか、ヒントをもらった(40代女性)。

- ・今一番悩んでいる歌唱指導にヒントが得られるのでは、と思って参加した。(20代女性)
- ・わらべうたの指導の意義を知ることができて良かった(60代女性)
- ・西洋音楽を否定する発言は残念。違いを認識することが大切(50代女性)
- ・洋楽を学んだり教えたりする時との共通点もあり、興味深かった(30代女性)
- ・実物を体験することのすばらしさを認識した(50代女性)(50代男性)
- ・自分自身に伝統文化の経験がなく、どう教育にとりいれていけばよいか、迷う。少しだけでも経験できて良かった。まずは、本物を生で聴くことから始めたい(30代女性)
- ・短時間だが、盛りだくさんの内容だった(40代女性)
- ・これだけのメニューを揃えられるのは、さすが東洋音楽学会(50代男性)
- ・大変興味深かったが、一つ一つが短時間であったのが残念(20代女性)
- ・時間が足りなかった(50代男性)
- ・全体の時間が長い。実演は、ちょっと体験するだけでなく、基本を解説して欲しかった(20代女性)
- ・レジュメが良くまとまっており、わかりやすかった(20代男性)
- ・もっと多くの聴衆に来てもらいたかった(70代以上)(70代以上男性)(40代女性)(50代男性)
- ・有料にした方が集客できたかもしれない(60代男性)
- ・遠方から来た甲斐があった(40代女性)(40代女性)

6. 各部分に対するご意見や感想

- ・基調講演に共感した(50代女性)(70代男性)
- ・シンポジウムの発言に共感した(40代女性)
- ・シンポジウムの発表から刺激を受けた。学校教育における日本音楽指導の現状と課題がよくわかった(20代女性)(50代女性)(50代女性)
- ・現場の先生の貴重な話を聞いて良かった(20代男性)
- ・現場の映像をもっと見たかった(40代女性)
- ・シンポジウムの時間が短かった(40代女性)(40代女性)(70代男性)
- ・パワーポイントの資料をもらいたかった(40代女性)
- ・シンポジウムの質問時間をもっと欲しかった(40代女性)(50代女性)
- ・評価に関する時間をもっと割いて欲しかった(50代女性)
- ・教科授業の時数削減の中で、どのように時間を確保するかという点にも触れて欲しかった(40代女性)
- ・ワークショップで、いろいろな伝統音楽を体験できて良かった(30代男性)(50代)(女性)(50代)(50代男性)(30代女性)(50代女性)(30代女性)(50代女性)
- ・いろいろな実演があるのも良いが、一つに絞っても良かったと思う(20代男性)(30代女性)
- ・子供たちのわらべうたが自然だった(50代)
- ・子供達が、自然な表情で音楽を楽しんでいて、嬉しかった(50代女性)
- ・わらべうたのワークショップでは、体を動かし、声を出すことの重要性を感じた(30代女性)
- ・わらべうたの実践例をどう理解すれば良いのか、わからない点があった(40代)
- ・能のワークショップは、初体験で勉強になった(40代女性)
- ・雅楽と地歌の試奏が良かった(60代)
- ・長唄を経験しているが、地歌もやってみたくなった(50代女性)
- ・難しい地歌より長唄が良かったかもしれない(60代男性)
- ・小さな音でも良いから、マイクを使わずにやって欲しかった(20代)

7. 今後の催しへのご要望

- ・今後も続けて欲しい(多数の方から)
- ・もっと早い時期に催しの案内が欲しい(40代女性)
- ・幼稚園、保育園についての実践もあると良かった(50代女性)
- ・現場の実践をどんどん紹介してほしい(20代男性)
- ・関西でも催してほしい(40代女性)
- ・謡をうたってみたかった(40代女性)
- ・地歌の地声の発声を教えてほしい(70代以上)
- ・古典のみでなく、民謡などもあると良かった(50代男性)
- ・狂言や歌舞伎の台詞などを、動作とともに取り上げてはどうか(50代女性)

8. テーマ「伝統文化の継承と発展」に関連するご意見

- ・洋楽一辺倒の音楽教育が変化することを期待したい(女性)
- ・明治以来の教育現場の「常識」に対して、何かできるかもしれないと期待を持った(40代女性)
- ・伝統音楽の良さを感じて捉えられるよう、子供達に直接に聴かせる機会が欲しい(60代女性)
- ・国のしっかりとした予算が欲しい(70代以上)(40代女性)
- ・楽器と同様、伝統音楽の声も大切に扱っていききたい(40代女性)
- ・日本語の歌は、邦楽の伝統、発声から出たものであって欲しい(60代女性)
- ・声は心を表すもの。日本のメロディーにのせて何かできるのではないかと、思った(40代女性)
- ・唱歌を念頭に、保育園の子供達に日本音楽に触れる機会を作っていきたいと思った(60代女性)
- ・わらべうたで心を開いてのびのびと声を出し、箏へとつなげるという実践を小学校ですぐにやってみたい(40代女性)
- ・頭声ではなく、声を張り上げてのびのびと民謡を歌う児童に対し、その声を認めて良かったと自信を持てた(40代女性)
- ・小中一貫教育が進められる中、幼少からの流れを意識して教育できると良い(30代女性)
- ・授業の教材が、子供の声、体、成長にあっているか、よく考えてみようと思う(20代女性)
- ・授業で和楽器を扱うための資料(DVDなど)を手に入れにくい。邦楽の普及に手を貸して欲しい(30代男性)
- ・弊害はあるにしても、初等・中等教育には、パッケージ教材も必要。そこから、地域の音楽を尊敬する態度を養えばよい。わが国の音楽を扱う教科書の充実を望む(40代女性)
- ・学会や大学の主催で、週1回あるいは夏休みに、実技をじっくり学べる仕組みを作りたい(50代男性)
- ・日本、諸民族の音楽をもっと学校教育に取り入れて欲しい(70代以上男性)
- ・日本人の音楽感覚を無視した「音楽療法」を正したいと思っている(50代男性)
- ・言葉をどのように音声化するかが、声や歌の鍵である。音楽のみでなく、国語や演劇の問題でもある(50代女性)
- ・宗教との関係も重要である(30代女性)
- ・従来の音楽指導との折り合いのつけ方には、難しい問題がある。教師のみでなく、一般の人の意識も変わっていないかなくてはならない(70代以上男性)